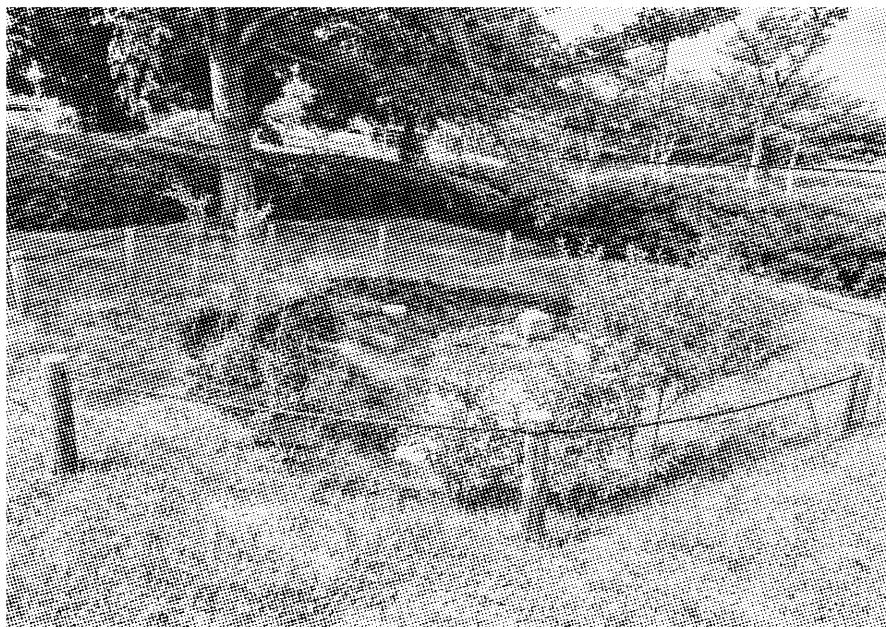


「雨庭」治水 じわり浸透

グリーンインフラ 多様な価値

雨水を地下に浸透させる「雨庭（レインガーデン）」が注目されている。自然の機能を活用して豪雨被害を抑えようと導入を支援する自治体が増えてきた。生物多様性の向上や二酸化炭素（CO₂）の吸収といった多面的な機能も期待されている。台風6号が日本列島を横断した翌日の6月4日、雨庭が設置されている大島小松川公園（東京都江戸川区・江東区）を訪ねた。



①大島小松川公園の雨庭。土や石によって雨水をゆっくりと地中に浸透させる仕組み



②緑溝のフタの内部。雨水をためていることが分かる

大島小松川公園内の斜面を下ると、くぼんだ場所がある。池のようだが水はなく、底には石や土が見える。これが「雨庭」だ。

施工した日比谷アメニス（東京都港区）によると雨庭の面積は6平方メートル。コンクリートを使っていないが、雨水を1立方メートルためることができる。土や石によって雨水をゆっくりと地中に浸透させる仕組みだ。周囲の90平方メートルから雨を集めるように設計されており、1時間24ミリ程度の雨量であれば浸透を続けることができる。

自然の機能を活用した社会課題解決の考え方は「グリーンインフラ」と呼ばれる。防災や気候上昇の抑制、生物多様性の向上、癒やしを求めた集客などの効果が期待され、国土交通省が推進している。雨庭もグリーンインフラの一つだ。公園内の歩道脇の溝「バイオスウェル（緑溝）」もグリーンインフラ。底には砂利が敷

松竹本社ビルの雨庭。植栽を改修し、雨水をゆっくりと浸透させる機能を持たせた



造園事業の強みを生かす。植栽を雨庭に変えること「（坂本執行役とで、地域の治水抑制員）。造園で使っている材料から「水をゆっくりと浸透させる」こととに合った材料を調達できるからだ。土地の条件によって最適に設計できる。開発によって地面が建物やアスファルトに覆われ、雨水が地下に染み込む土地がなくなっている地域では、地下水を増やす涵養（かんよう）が求められる。そうした土地の雨庭には浸透性のある材料を選ぶ。同社のこれまでの施工実績は約10カ所。東京・東銀座にある松竹本社ビルの雨庭も手がけた。グリーンインフラを推進する東京都の事業に採択され、植栽の一部を改修した。都市部の企業も事業所を

き詰められており、機能は雨庭と同じ。溝の底にあるフタを開けてみると、内部に水がたまっていた。取材前日の台風による雨水だ。溝の底を掘ると同じ水位の水があるという。雨水を受け止めた

地球温暖化によって短時間に猛烈な雨が降ることが珍しくなくなっている。想定を超える雨が流入し、排水路や下水道から水があふれ出す内水氾濫が頻発している。雨庭は雨水をゆっくりと地下に浸透させることで排水路や下水道、河川への雨水の流入を遅らせて水害被害を軽減する。下水道や堤防の強化には予算と時間がかかるが、雨庭

雨庭は雨水をゆっくりと地下に浸透させることで排水路や下水道、河川への雨水の流入を遅らせて水害被害を軽減する。下水道や堤防の強化には予算と時間がかかるが、雨庭

日比谷アメニス 造園の強み生かし機能最大化